

# エレン・グラスゴーと「南部淑女神話」

サザン・ベル

今井加寿

## I

一般に神話というものは文化的価値や信条の一体系であり、歴史上の現象を解釈するために形式・秩序を提供するものである。神話は、つまり、社会の複雑に絡みあった価値観や信条に統一性を与え、社会に一種の秩序とアイデンティティを付与する役割を果たしている。例えば、「アメリカン・イノセンス」という伝統的理念は、アメリカの文化にひとつのアイデンティティを与えるものとなった。しかし神話は対象となった現実を超絶して、独り歩きを始める。すなわち、現実の現象から発生したはずの事柄が神話となり、逆に神話が物事を規制していく働きをするのである。このような神話の働きについて、ロラン・バルトはその著『神話作用』のなかで次のように言及している。

毎日そしていたる所で、人間は神話に捉まり、自分の代りに生きている不動の原型に神話によって引き戻される。その原型は、巨大な寄生虫のように内部から人間を窒息させ、人間にその活動の限界を示し、その範囲内で人間は世界を変えることなしに苦しむことを許される。<sup>1</sup>

アメリカ南部の神話において、南部が「サザン・ベル」(“Southern belle”-以下「南部淑女」)という理想の女性像をつくりあげ、その理想像が現実から離れ、女性を偶像化し、逆にその理想像が女性達を規制したのはこのような神話作用によるものであったと言える。エレン・グラスゴー(Ellen Glasgow, 1873-1945)は、南部の歴史を引き継いで形成されたこの「南部淑女神話」の女性像と現実の女性像とのずれに切り込み、南部女性の実像に迫ろうとした。

グラスゴーは、彼女の小説の手法について述べたエッセイ集『ある成果』(*A Certain Measure*, 1938)のなかで、自分の愛するヴァージニア州の南北戦争後の社会史を小説の形にして残そうとした、と述べている。<sup>2</sup> 19世紀末から20世紀始めのグラスゴーの時代には伝統的価値や信条の規範はゆらぎかけており、社会秩序の見直しが必要であった。<sup>3</sup> そのような環境にあって、グラスゴーは彼女の諸作品において南部の女性像に光をあて、南部淑女が南部の神話的存在であることを確認し、さらにその神話による社会規範の中で抑圧され、苦悩する女性たちを覚醒させようとしたのであった。この意味で、彼女の作品を南部淑女神話の再解釈として読み取ることが可能であろうと考えられる。

本論では1913年、グラスゴー40歳の時の作品『ヴァージニア』(*Virginia*)を通して、彼女がいかに南部淑女神話を提示し、いかにその神話を批判的に解体しようとしたかについての考察を試みる。

## II

いわゆる「南部淑女」(サザン・ベル)とは、どのようなものに定義されるのだろうか。キャスリン・シーデル(Kathryn Seidel)は、ジョン・ペンドルトン・ケネディー(John Pendleton Kennedy)の『つばめの小屋』(*Swallow Barn*, 1832)にその特徴が描かれていることを指摘して、次のように定義している。「広大なプランテーションに住む所有者の家族(したがって貴族階級)の若く未婚の娘。結婚適齢期でいつ求婚されても良い。せいぜい16才か17才だが、生涯で一番輝かしい時期にいる。」<sup>4</sup> その期間は短く、結婚するまでで、他のプランテーション所有者と結婚して“matron”(既婚婦人)になり、夫のプランテーションで社会から孤立して過ごすことが一般的であった、ともある。またニーナ・ベイム(Nina Baym)は南部女性のイメージを二種類に分け、ひとつは独身で“princess”のイメージを持つ“belle”、もうひとつは既婚婦人で“queen”のイメージを持つ“matron”とし、ともに南部の理想の女性像と定義している。<sup>5</sup>

奴隷制を基盤とする南部プランテーションのシステムは、17世紀イギリスの家父長制による大土地所有システムをそのまま受け継ぎ、女性達もその社会組織の中に組み込まれていった。そして南部の女性を理想的なイメージで規制する南部淑女神話によって、ひとつの社会秩序を提示したのであった。<sup>6</sup> アン・グッドウィン・ジョーンズ(Anne Goodwyn Jones)は『明日は明日の風が吹く』(*Tomorrow Is Another Day*, 1981)の中で、アメリカ独立の前から南部男性は南部女性を崇拝していたが、南北戦争そして再建時代にいたって、南部が地域として、ことさらその独自性を意識していく中で、南部女性達が南部そのもののシンボルとしての役割をになっていったことを指摘している。<sup>7</sup> 敗戦によるプランテーションの崩壊によって、定義上の「南部淑女」は一般的には存在しえなくなった。にもかかわらず、それは南部のアイデンティティーを形成する役割を果たす神話的存在であり続けたのである。

グラスゴーは自分の生まれ育ったヴァージニア州を舞台に南北戦争後の南部女性を描いている。ヴァージニア州は、アメリカにおける最初のイギリス領植民地であり、州都リッチモンドは、南北戦争において南部連邦の中核となった南部白人上流階級の文化を代表する都市であった。そこはヴィクトリア朝の古い伝統を誇る典型的な南部上流女性像の発祥の地であった。<sup>8</sup> 自らが、いわゆる沿岸地域出身の貴族階級の血をひいた南部女性であったグラスゴーは<sup>9</sup>、南部淑女の規範をかたくなに守ろうとしている女性達は、作り上げられ偶像化された女性像に逃避していると言う。グラスゴーによれば、南部淑女の理想にとらわれた人々は、真実の姿を見つめようとせずその幻想に回避し、自己の健全な成長が阻害されているのである。このような逃避的生き方を彼女は「回避的理想主義」(“evasive idealism”)と呼び、『『回避的理想主義』とは自己欺瞞の状態をいい、その状態において精神は不愉快な現実から逃れ、希望する幻想で身を守ろうとする』と定義し、これが南部的伝統であると批判した。南部女性に課せられた南部淑女神話こそはこの偽りの「回避的理想主義」であり、女性達は醜い現実から逃避し、自らを理想像の覆いで隠そうとする。この理想像が南部女性達を束縛している桎梏であるとグラスゴーは分析する。<sup>10</sup>

むろん、このような理想の女性像は白人のエリート階級の婦人に関してのものであり、白人労働者や黒人に関するものではない。グラスゴーの扱う女性たちは、南北戦争の敗北によって転落してゆく貴族階級の人々であり、同時に、新しく出現してきた近代ブルジョア階級の婦人たちである。特にグラスゴーは、近代が生み出した閉鎖的な核家族のなかで孤立、疎外されつつ、母になっていく南部女性達に問題意識を持ち多くの作品で彼女達の生き方を描いている。

### III

『ヴァージニア』について、グラスゴーは自叙伝『内なる女性』(*The Woman Within*, 1954)の中で「私の成熟を示す最初の作品である」と語り、この作品でようやく「南部女性の社会史」という自分のジャンルを見いだしたと言っている。"

この作品は、南北戦争後、経済的進歩が始まり、社会が変化していく中で、昔ながらの淑女でありつづけようとする美しい南部女性、ヴァージニア・ペンドルトン (Virginia Pendleton) の半生を描いている。1884年5月、花の咲き乱れるヴィクトリア朝風の女学校の庭でふたりの若く美しい乙女、ヴァージニアと親友のスーザン・トレッドウェル (Susan Treadwell) が白いローンのドレスを着て、恩師である独身の学院長プリシラ先生 (Miss Priscilla) を訪ねる。ヴァージニアは、南北戦争終結の年に人口2万1千人のこの町ディンウィディーに生まれ、この女学校を2年前に卒業した結婚適齢期の20才の娘で、戦後の南部とともに成長している。ここでグラスゴーは南部淑女の典型を提示する。即ち白い肌、小柄できゃしゃな体つき、黒い髪、雨上がりのヒヤシンスのような青い瞳といった外観を与えられている。みつあみをした髪を王冠のようにまいて頭にのせ、さながら伝承神話の世界の女神を彷彿させる。「その瞳によって、そして香水のように彼女から香り立つ魅力的な人柄によって、彼女が昔ながらの理想の女性を体現していることは明らかであった」<sup>12</sup>と描かれてる。このヴァージニアに淑女教育をしたのがプリシラ先生であり、その教育理念は次のようなものであった。

... the less a girl know about life, the better prepared she would contend with it . . . and this ignorance of anything that could possibly be useful to her was supposed in some mysterious way to add to her value as a woman and to make her more desirable companion to a man who, either by experience or by instinct, was expected to know his world. (22)

「女性の無知は美德である」というこの学校教育に加えて、ヴァージニアの人格形成が古い伝統に従う両親に負うことをグラスゴーは強調している。牧師である父親は南北戦争前のヴァージニア州が完璧であったといい、彼の望むところは進歩ではなく祖先の理想への回帰であった。母親もまた南北戦争前の南部を理想とし、奴隷制の廃止を決定した憲法修正13条に承服せず、南部の降伏と敗戦を悲しみ、すりきれた黒の絹のドレスを着ていまだに喪に服している。他人の喜びや悲しみのためにのみ生きているような女性であり、自分の使命は娘を美しく清らかな淑女に育て上げることと信じている。手が汚くなるという理由で娘のヴァージニアには針仕事もさせず、「女らしいということはまず受け身であることです」(149)と教えていた。

こんなヴァージニアが親友スーザンの従兄であるオリバー・トレッドウェル (Oliver Treadwell) と恋におち結婚する。オリバーの両親は彼が10才の時オーストラリアへ渡り、事業で成功した。しかし、両親を亡くした彼は、独りアメリカへ戻ってきたのである。ヴァージニアは一目でオリバーの魅力にとりつかれる。オリバーもヴァージニアにイタリア・ルネッサンスの聖母像を連想し、その青い瞳とやさしく穏やかな表情にまばゆい幸福感を感じ、理想の女性を見つけたと思う。彼は女性の存在価値は若さと美しさにあるといい、「若さと美しさが無くなったら女性には何の価値があるのか」(113)と思っているような人物なのであった。

ヴァージニアは結婚式まえに母に次のように教えられる。

Your first duty now, of course, is to your husband. Remember, we have always taught you that a woman's strength lies in her gentleness. His will must be yours now, and wherever your ideas cross, it is your duty to give up, darling. It is the woman's part to sacrifice herself. (199)

そしてヴァージニア自身も「お母様がお父様にしてあげたように、私もわがママをいわず、よく尽くすつもりです」(201)と納得してしまう。

このように第一部「夢」(“The Dream”)において、外見的に美しく、内面的に敬虔で、従順で無垢な理想の南部淑女ヴァージニアと若々しく魅力的なオリバーとの恋愛による結婚が成就し、南部淑女神話に規制された女性の典型的な表象が提示されている。

#### IV

作品は第一部「夢」で恋愛による自由な結婚は完結し、次の第二部「現実」(“The Reality”)の部分で南部淑女神話の解体、非神話化が始まる。ロラン・バルトの言葉を借りれば「まやかしの曝露」(デミスティフィカシオン)<sup>13</sup>をグラスゴーは行なうのである。

グラスゴーは南部淑女神話の解体を大きく二つの段階によって行なう。まず、第一にヴァージニアに肉体的労苦を経験させる。オリバーにとって女の存在価値である「若さ」と「美しさ」を彼女から剥ぎ取るのである。オリバーは結婚生活を営んでいくために自分の夢である劇作家のみちを一旦諦め、叔父の勧めに従って、ウェスト・ヴァージニア州の鉱山町マトカシティーで叔父の事業を手伝う。グラスゴーは、ヴァージニアに見知らぬ土地で孤立した自分について、また現実の苦労について、故郷の母への手紙の形式で一人称で語らせる。例えばこの鉱山町は北部や西部から来た人ばかりで馴染めないこと、黒人のメイドがいなくて白人を雇ったが、役に立たず辞めさせたこと、従ってこれまでやったこともない暖炉への朝の火入れから、部屋の掃除、週二回パンを焼くことなどの家事を自分でやらなければならないこと等についての愚痴を述べさせる。ヴァージニアは、ここの女達は南部女性と違って「馬のようだ」(218)、と言って付き合いおとせずに、家の中に閉じこもり、外の社会から孤立し、夫だけを頼りに生活する。「結婚した女は友人を多く持つべきではない。夫だけで充分」(212)と考え、オリバーのいないときは坐ってオリバーの事を考えるような生活のヴァージニアに、グラスゴーは、出産、育児の肉体的苦痛、また生後間もない子供を病気でなくすという経験をさせる。このように今まで偶像的存在である南部淑女を演じ続けようとしたヴァージニアに現実の苦労を経験させることによって、現実の南部女性像が明らかにされていく。しかし苦労の中でヴァージニアはあくまでも南部淑女の理想を追求し、結婚前の母の助言どおり、自己犠牲と忍耐の毎日を過ごすのである。

ついで、南部淑女神話の非神話化の第二段階として、恋愛による結婚の不完全性が描かれている。ヴァージニアが高座のうえの女神のままできて欲しいと願う夫は、三人の子の母としての重荷の下でやつれて若さと美しさを失っていく彼女に不満を持ち始め、家に帰る時間が段々遅くなる。オリバーの劇がニューヨークで売れ出し、鉱山町での仕事を辞め、家族は故郷ディンウィディー

へ戻るが、オリバーは自分の劇の主役である女優とニューヨークで関係を持ち、ヴァージニアのもとから離れてしまう。オリバーと女優との関係を全く疑うことも知らず、オリバーが病気だと聞いてニューヨークへ訪ねていった時、オリバーの態度に変化を感じたヴァージニアは、次のように思う。

Love, which had seemed to her [Virginia] to solve all problems and to smooth all difficulties, was helpless to enlighten her. It was not love — it was something else that she needed now, and of this something else she knew not even so much as the name. (288)

ヴァージニアにとって愛は永遠に二人を導くものであり、生涯変わらぬものはずであった。しかしもはや彼女の信じていた愛情は何の役にも立たず、何をよりどころにすれば良いのか途方にくれるのであった。夫に対して常に受け身であろうとするヴァージニアは、オリバーに対等に向かっていくすべも知らない。

ウェスト・ヴァージニアで過ごした五年のうちに、かつて美しくきゃしゃだったヴァージニアは夫と子供のためにだけ生きる疲れ切った、年より老けて見える女になってしまう。久し振りに故郷で再会する親友スーザンの目を通して、若さと美しさを失ったヴァージニアを描くグラスゴアの描写は非常に厳しい。

Above the harsh black of her dress, which added ten years to her appearance, she saw the darkened circles rimming her eyes, the faded pallor of skin, the lustreless wave of her hair, which had once had a satiny sheen on its ripples. (385-386)

こうしてグラスゴアはヴァージニアを南部淑女の高座から下ろし、その尊厳と美しさを崩していったのである。

## V

ヴァージニアの苦悩の原因となったものは、皮肉なことに南部淑女の美德であるべき肉体的弱さと無垢である。脆弱な彼女が妊娠、出産、育児、家事という肉体労働に対応できないことが苦悩の原因のひとつとなったのである。また、美德とされた無垢は裏を返せば、すなわち知性の欠如である。知性の欠如からくる変化する環境への順応の困難、夫の成長、欲求に対する柔軟性の欠如、そして何より自分自身の変化を柔軟に受け止め、成長することのできないヴァージニアの愚かさを、グラスゴアは厳しく描いている。母親から教えられた価値規準のみをいつまでもそのまま信じ、そこから脱却することができないヴァージニアに、グラスゴアは当時の一般的な南部女性達の悲哀を見ていたにちがいない。

手厳しく南部女性の愚かさを描くことによって神話の表層を剥がしながら、一方、グラスゴアは南部女性の中の崩せないもうひとつの層を明らかにしていく。いわば南部淑女神話が解体されていく中で、ジョセフ・キャンベル (Joseph Cambell) が述べるような原初的母性神話が浮上

し、あたかも神話の基本的なイメージである子供を抱く母性像が照らし出されていくようである。キャンベルの述べる原初的母性神話とは、女性が人間生命の誕生とその生命維持に貢献する存在であり、そしてそのことが、自然の中心であり、自然の後継者でもある女性の役割の全てであったというものである。また母親と子供との「神秘的な係り合い」に対して男性は薄弱な、そして究極的には「意味の乏しいかわり」を持つにすぎないというものである。<sup>4</sup>

ヴァージニアが母性を強く意識する決定的な出来事は、オリバーが女性の幼なじみと共にアトランティックシティへ小旅行へでかけることになり、ヴァージニアも久しぶりに子供を母親に頼んで一緒に行こうとしたときのことである。彼女は末っ子の5歳のハリーの様子がいつもと違うことに気がつく。「私は行けないわ」と母としての決断をするヴァージニアに対し、「僕は行くからね」とオリバーは女友達と旅行へ出かける。母子の関係に比べ、父子の関係の希薄さが強調される場面である。ジフテリアにかかって生死の間をさまよう息子ハリーの側でヴァージニアは母性という、自己のなかに存在する神秘的なものを意識し、「この子の命を救うのなら私の全てを捧げましょう」(351)と決心する。その結果ヴァージニアは寝ずの看病に疲れ果て、ハリーの命と引き換えに自分の美しさと若さを一段とすり減らしてしまったかのようなのである。ヴァージニアの中の強い母性は次のように描写されている。

Yesterday I sacrificed the children to Oliver, and to-day I sacrificed Oliver to the children. I love Oliver as much but I have made the children. They came only because I brought them into the world. I am responsible for them. (343)

また、ヴァージニアが子供の頃からかかりつけている老医師が、ヴァージニアの母親も同じように生死をさまよう子供の横で苦しんだことを伝えたところでは、

Her [Virginia's] own mother! So she [Virginia] was not the only one who had suffered this anguish — other women, many women, had been through it before she was born. It was a part of that immemorial pang of motherhood of which the old doctor had spoken. (355)

「あの遠い昔からつらなる母であることの苦悩」(“that immemorial pang of motherhood”) という表現が、母性が脈々とつながって行くものであることを物語っている。さらに、母性について次のように述べられている。

No woman who had fought with death for a child could ever be the same afterwards — could ever value again the small personal joys, when she carried the memory of supreme joy or supreme anguish buried within her heart. (356)

ヴァージニアは母親から母親へと繋がる母性という神秘的なものの存在を強く感じる。ヴァージニアの母性は自然や運命と勇敢に闘っていくようなものではなく、子供の死という人間の力ではどうにもならない自然の力に、神に祈ることによって身を任せていくような受け身の母性であった。それは、自己の力を超越した耐える強さを持った母性であった。このように、南部淑女神話

が解体されたあと、そこに開示されたのは、ヴァージニアの中に存在する強い母性であり、古今東西の人間の歴史に脈々と続く原初神話の一つである母性神話であった。しかしながら、この母性神話がまたしてもヴァージニアを規制する桎梏として機能していくのである。

## VI

オリバーはニューヨークにて別居し、子供達は成長して家を離れ、46才になったヴァージニアは独り空っぽの家に取り残される。時々訪れるスーザンは、かつて「私はヴァージニアのようなベル (belle) じゃないわ」(110) と言ったが、今度はヴァージニアが「私はあなたのように頭のいい女じゃないわ。私はただ妻であり、母であるだけのためにつくられたの。他のなんでもないわ」(449) と言う。彼女は自分が規範に従って生きることしか出来ないことを自覚している。規範となるのは、「南部淑女神話」であり、それを含む一切の因襲であった。「母性神話」というものも、ヴァージニアの生を規制する桎梏として機能するものであり、母親としての彼女の生はまさにそれに囚われた生であり、「他のなんでも」なかったのである。このようなヴァージニアの生き方は知的で母親思いの娘ジェニーによって次のように批判される。

“You can’t help being old-fashioned, I know. You are not to blame for your ideas ; it is Miss Priscilla.” Her voice grew stern with condemnation as she uttered the name. “But don’t you think you might try to see things a little more rationally? It is for your own sake I am speaking. Why should you make yourself old by dressing as if you were eighty simply because your grandmother did so?” (431)

こうしてグラスゴーはジェニーの言葉を借りてヴァージニアという南部女性の非自律的な生き方を批判する。が、一方では南部女性達を束縛する因襲の力の強さを強調している。疑う事も知らなかったヴァージニアがとうとうオリバーと女優との関係を知り、初めて彼女と対決しようと自らニューヨークの彼女の部屋まで出かける。決定的な場面においてですらヴァージニアのとった態度は、「知性を通じ、血肉にまで浸透した」行動規準に律せられたものであり、南部淑女としての規範からはずれるものではなかった。

Then, because it was impossible to say the things she had come to say, because even in the supreme crises of life she could not lay down the manner of lady, she smiled the grave smile with which her mother had walked through a ruined country, and . . . passed out into the hall. She had let the chance go by . . . , yet she knew that, even though it cost her her life, . . . she could not have done otherwise. In the crucial moment it was principle and not passion which she obeyed ; but this principle, filtering down through generations had become so inseparable from the sources of character, that it had passed at last through the intellect in the blood. (487-488)

グラスゴーは、主人公ヴァージニアの半生を描くことによって南部神話の中の女神的存在であ

る南部淑女について考察し、ひとつの南部淑女神話を提示した。つぎにヴァージニアに肉体的労苦と結婚の失敗を経験させ南部淑女神話の虚妄性をあばくという非神話化をおこなった。次いで、母になったヴァージニアに内在する崩されない普遍的な強い母性を強調し、その母性神話を体現するかにみえる彼女の生き方を描き出した。さらに結局は母性神話にとらわれ、自己犠牲にのみ生き、健全な自己実現が出来なかったというヴァージニアの生き方を娘ジュニーの目を通して批判した。南部女性達は大地所有制のなかで自らに課せられた南部淑女神話にしがみつこうとし、さらに原初的母性神話にとらわれていく—それは、敗戦の屈辱の中でおもひとつの理想像を追求し、気品をもって生き延びてきた多くの南部女性達の真実の姿であったのだろう。そのような南部女性達を間近に見てきたグラスゴーが示したのは、南部淑女神話と原初的母性神話との複雑な絡み合いを解明しつつ、「神話に捉まり」、「神話によって引き戻され」つつ、苦悩するものとしての南部女性の姿であったと言えよう。

※本稿は日本英文学会中部支部第49回大会（1997年10月11日、中京大学）での口頭発表に加筆修正したものである。

#### 注

- 1 ロラン・バルト、『神話作用』篠沢秀夫訳（現代思潮社、1967）、206.
- 2 Ellen Glasgow, *A Certain Measure* (1938 ; New York : Harcourt, 1943), 4.
- 3 Anne Firor Scott, *The Southern Lady ; From Pedestal to Politics 1830-1930* (Chicago : U of Chicago P, 1970), 212-231.
- 4 Kathryn Lee Seidel, *The Southern Belle in the American Novel* (Tampa : U of South Florida P, 1985), 3.
- 5 Nina Baym, *Feminism and American Literary History* (New Jersey : Rutgers UP, 1992), 193.
- 6 Scott, 16.
- 7 Anne Goodwyn Jones, *Tomorrow is Another Day* (Baton Rouge : Louisiana State UP, 1981), 8.
- 8 Marshall W. Fishwick, *Virginia : A New Look at the Old Dominion* (New York : Harper, 1959), 200.
- 9 Fishwick, 189.
- 10 Glasgow, *Reasonable Doubts : A Collection of Her Writings*, ed. Julius Rowan Raper (Baton Rouge : Louisiana State UP, 1988), 5.
- 11 Glasgow, *The Woman Within* (New York : Harcourt, 1954), 188.
- 12 Glasgow, *Virginia* (New York : Doubleday, 1913), 5. この作品からの引用はすべてこの版に基づき、以後、引用箇所は括弧内に頁数を示す。
- 13 バルト, 222.
- 14 ジョセフ・キャンベル、『時を越える神話』飛田茂雄訳（角川書店、1996）、7-8.